

こちら危機管理課お天気相談所

～気象防災アドバイザーによるすぐに役立つ気象情報を月1で配信～

※気象防災アドバイザーとは「地元の気象に精通し、地方公共団体の防災対応を支援することができる人材」として気象庁が委嘱した方です。



Yoshiaki Yano

熱中症にご注意！

関東甲信地方の梅雨明けの平年は7月19日ごろです。梅雨が明けるとともに暑さは一段と厳しさを増し、心配になるのが熱中症です。東京の平年値を見ると、一年中で一番気温が高くなるのは8月3日から9日ごろですが、天気予報などで発表される“気温”は、日陰の風通しの良い芝生地で、高さ1.5mでの空気温度です。東京では裸地が少なく、ほとんどがコンクリートやアスファルトなどで出来ている街では、日射によって熱せられやすく熱が溜まることから、葛飾区民がお住まいのところで外の気温は、東京の気温として発表される温度よりもたいてい高くなります。気温35℃のときでも、日向の路面温度は約60℃にもなることがあります。小さな子どもさんや散歩中の犬は、大人以上に暑さを感じているはず。道路や歩道に手を当て、どのくらい熱いか実感していただければと思います。

グラフは熱中症による年間の死亡者数を示しています。但し、2020年だけは6～9月までの概数です。このところ1,000人以上の方々が熱中症で亡くなり、この数は自然災害での死亡・行方不明者の比ではなく、事態の深刻さを示しています。猛暑が見込まれ熱中症予防の呼びかけとして“災害級とも言える暑さ”という言葉が用いられますが、死亡者数で見るとそれ以上のものです。

身体で感じる暑さ・不快感は気温だけで表すのは十分ではありません。気温がそれほど高くないのに蒸し暑さで不快を感じるように、湿度も大きく関係してきます。また、日差しや地面・建物から出ている輻射熱など周辺の熱環境も関係します。これら3つの効果を考慮し、熱中症の危険度を判断する数値として用いられているのが「暑さ指数(WBGT)」です。それぞれの効果の割合は、気温が1、湿度が7、輻射熱が2の割合で組み込まれています。湿度が7割を占めるのは、湿度が高いと汗を蒸発しにくくなり、身体から空気中に熱を放出することが困難になるためです。“暑さ指数”の詳細については、環境省の「熱中症予防情報サイト」をご覧ください。

環境省・気象庁は、この“暑さ指数”を用いて「熱中症警戒アラート」を発表しています。熱中症の危険性が極めて高いと予測される前日または当日に発表されます。気象庁HPトップの「防災情報」にある「気象防災>熱中症警戒アラート」から入りご確認ください。発表されていたなら、日頃から実施されている熱中症予防対策をより徹底していただけますようお願いいたします。不要不急の外出は避け、昼夜を問わずエアコンなどを用いて適切な室内温度を保ち、特に高齢者・子どもには周囲からの気配り、また屋外での運動や作業は原則中止の判断をお願いします。喉が渇く前にこまめに水分補給するなど、普段以上の熱中症予報をお願いしたいと思います。

熱中症による年間死亡者数の推移

